東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

教員ストレスに影響する要因の検討：学校教員の労働環境と意識

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2013-04-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐野,秀樹, 蒲原,千尋
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132597

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　64: 189－193，2013.

教員ストレスに影響する要因の検討

―― 学校教員の労働環境と意識 ――

佐　野　秀　樹*・蒲　原　千　尋**

教育心理学講座

（2012年9月10日受理）

1．はじめに

最近，教師のメンタルヘルスの問題が増大している。経験年数の少ない教員が突然辞職したり，熟年の教員がうつ病で休職したりするなどがその例である。本論文では，メンタルヘルスと関わる基礎的な要因についての研究の手始めとして，教員の給与，労働時間などいくつかの側面について検討する。

2．教員の休職の統計

図1は，最近の文部科学省の調査[3]を示したものである。2000年から2008年までの，全国の教員の年間休職数について示したものである。この図から，最近の休職者全体の増加とともに，精神疾患による休職の増加が著しいことがわかる。2000年には精神疾患による休職者は，休職者全体の約半数であったが，2008年には全体の7割近くになっていることがわかる。このデータは，最近，精神科系の医療への抵抗が減って，多くの教員が医療を受ける傾向にあることを踏まえても，最近の教員にとって，メンタルヘルスの問題が大きな要因となっていることを示していると言えよう。

この統計結果では，精神疾患の詳しい内訳は，示されていないが，現職の休職者なので，重度の精神疾患よりも，おそらく職場の人間関係や職務内容の変化，多忙さなどのストレスと関係した疾患である，適応障害，心身症，うつ病，不安障害などが増加しているのではないか。また新しい職階性（主幹，主任等）の導入，事務作業におけるパソコンなどのIT化なども，特に熟年層以上の教員にとってストレス要因となっていると思われる。

本研究では，メンタルヘルスに関係する要因として，教員の給与や労働時間について検討した。給与や労働時間は教員の生活を支える基本的な要因であり，国際的に比較にすることによって，日本の教師のおかれた状況を理解しようと試みた。さらに，教職の魅力と教員の悩みについての全国データを検討することで，ストレスと関連した教員の意識について考察した。

3．教員の給与の国際比較

明治の開国以来，我が国は，教育に力を入れ，国力の発展を目指してきたこともあって，現在の日本の教員の社会的地位や給料などは，他の職業や他の国の教員と比較して恵まれていると言われている。図2は，2008年における日本，米国，OECD諸国の小学校教員の給与平均を比較した[2]ものである。この図では，3つの国，地域の比較の他，教員の2つの経験年数（初年度と15年）による比較がなされている。この図によると教員の初任給では米国が最も高く，日本とOECDはほぼ同様のレベルである。15年の教職経験者では，初任給と比べ，全体的に給与は上昇しているが，国・地域別に見ると，日本の給与がもっとも高く，次に米国の教員，そしてOECDと続いている。同じ傾向が，中学校，高等学校でも見られた。

この図から，日本の教員の給与は，最初は低めであるが，経験を積んでいく程，他の国より上昇すること

＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊＊　清瀬市教育相談センター

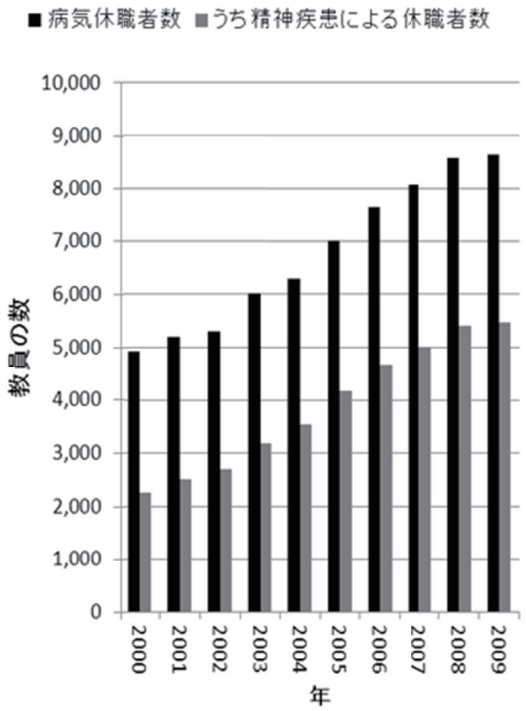

図１　病気休職者数と精神疾患による求職者数

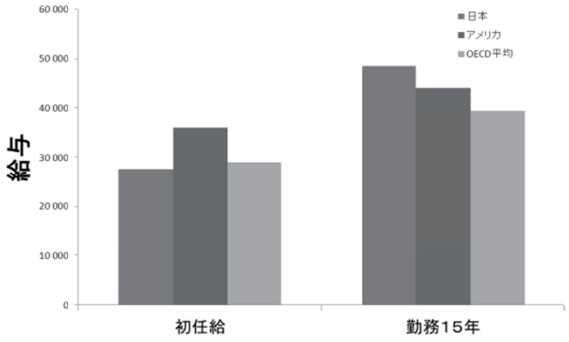

図２　日本，アメリカ，OECD国平均の小学校教員の給与比比較

がわかる。もちろん，給与額の国際比較はその時の為替相場によっても大きくされる。各国，各地域における通貨の実際の価値なども違うので比較はあくまでも参考程度であるが，それでも日本の教員給与レベルは，比較的良いと言えるかもしれない。また，日本の終身雇用制にもとづいた経験年数による給与の上昇が示されているといえよう。

４．教員の労働時間の国際比較

表１は，小学校の教員の労働時間についての報告である[1)]。これを見ると，最近日本の教員が平均11時間半ほどの労働をしていることがわかる。最近の著者の聞き取りによると，朝７時頃の出勤，夜11時頃の帰宅，そして週末もクラブ活動の指導で出勤する教師もいる。同じ調査では，中学校・高等学校も同様の傾向を示しているが，中学校の場合，1997年から2008年まで，約一時間勤務時間が増えていることが示されていて，最近教員の労働時間がさらに長くなっていると思われる。

教師の一日の労働時間が長くなっている理由として，学校が週休二日制になり，以前は土曜日にしていた仕事を金曜日までにしなければならなくなったことが一つの要因であるかもしれない。しかし，それにしても長い労働時間と言える。

表２では，OECDの報告を基に，各国・地域の年間の労働時間を比較したものであるが，日本の教員の労働時間が極端に長いことがわかる。多くの国が加盟しているOECDの労働時間と比較しても，OECDの教員からみると，日本の教員は，800時間以上，一日８時間とすると100日以上にも及ぶ労働をしているのである。これは，海外の教師の雇用形態，年間の雇用期間（夏は雇用されていないなど）などについて，詳細に検討する必要があるが，Karoshi（過労死）という日本語表現が，海外でも通用するほど，我が国の労働環境の現実を示していると思われる。

もちろん，労働時間についても各国，地域でその定義や扱い方が違うかもしれないので，この比較も慎重にする必要がある。おそらく，日本では諸外国では教員がやらないような仕事も行っていると思われる。また国によっては，教師が学校に勤めながら他の仕事も同時についている場合もある。しかし，単純に教員の労働時間の長さを考慮にいれてみると，おそらく日本の教員の時間あたりの給料は他の諸国よりかなり低いことになり，最近の日本の教員の労働条件は，一定の生活のための経済的条件は満たしているが，他国には見られない労働時間を要求されていると言える。終身の職業がある程度保障されているかわりに，非常に多くの時間，日本の教員は働くことを求められているのではないだろうか。

表１．日本の小学校教員の一日の労働時間

年	労働時間
2007	11時間12分
2010	11時間24分

表２．小学校の教師の就業時間の国際比較[4)]

日本	USA	Germany	OECD平均
1960時間（408＊）	1332時間	1742時間	1695時間

＊年間の残業時間

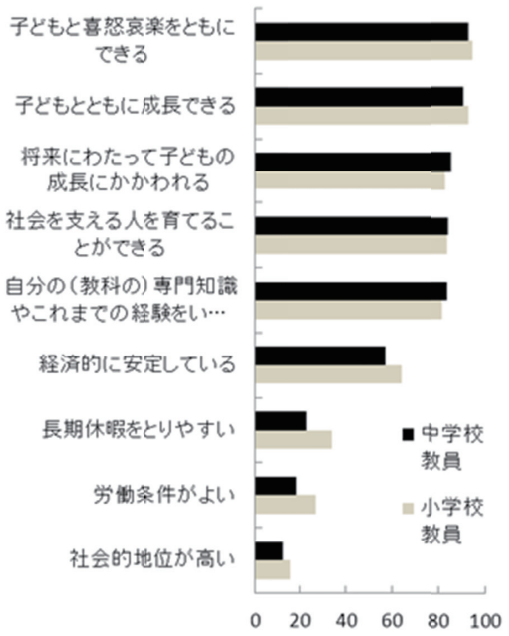

図３　教職の魅力（%）

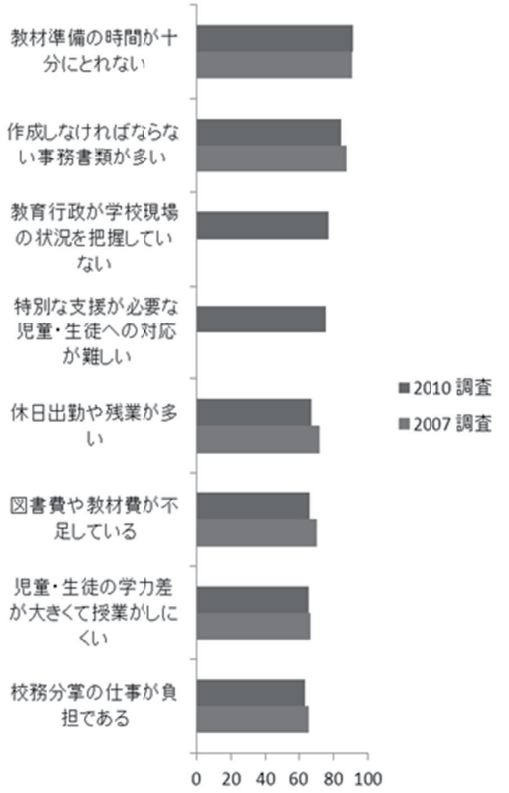

図４　教員の悩み（小学校）

５．教員の意識

教員のストレスについての意識を調べるためには，彼らの仕事の実態について知る必要がある。図3と図4は，日本の教職の魅力と教員の悩みについて，全国の小学校の教員に調査したものである（ベネッセ教育開発センター，2011）[1)]。

教職の魅力の上位の項目は，「子どもと喜怒哀楽を共にできる」，「子どもとともに成長できる」，「将来にわたって子どもの成長にかかわれる」，「社会を支える人材を育てることができる」などであり，教員は子どもを育てることを楽しみ，自分たちの仕事が社会に役立つことを魅力として感じている。

それに対して，教員の悩みを見てみると，上位の項目は，「教材準備の時間が十分に取れない」，「作成しなければならない事務書類が多い」，「教育行政が学校現場の状況を把握していない」，「特別な支援が必要な児童・生徒への対応が難しい」などである。

教職の魅力と教員の悩みへの回答を合わせてみると，教員が教職の魅力としてあげている児童生徒へのかかわりに十分な時間がとれない実態を示していて，このことが多くの教員の職場でのストレスの大きな要因となっていることがうかがわれる。こうした傾向について諸外国と比較したデータを今後見出す必要があろう。また授業準備に十分な時間がないというのは，他の国の教員も経験することのようであるが，日本の場合は授業以外の負担が特に多いので，さらに教員の意識については研究する必要がある。

６．考察

日本の教員のメンタルヘルスが原因による休職が年々増加していることが示されるなかで，その原因や背景について検討することを目的として，現在得られる教員に関するデータ，調査結果について適切なものを選び，検討を加えた結果，以下のことが分かった。

１）日本の教員は他の国と比べ，一定レベルの給与を得ているが，労働時間あたりにすると，他の国より低い収入を得ている。

しかしこの事実は少し考慮すべき点がある。日本の場合は，終身雇用制度が強いため，一律に給与が上昇する前提で，定年まで朝から晩まで教員として働くことが多い。他の国，たとえば米国では，教員が数年で，辞職すること場合も多く，１年に180日程度の雇用であるし，また雇用されていない長期の休暇の際に，他の仕事で働くこともできる。

精神面からみると，日本の教員のような働き方は，生活や地位の安定は得られるが，（諸外国からみると）変化の乏しい，固定（硬直）していると映り，教員に対して，より変化のある雇用の在り方で，教員に活力を与えようという政策がなされつつある。例えば，教員の給与と関係して，最近米国で給与制度を職務に関

する評価に基づき，能力給にしようとする動きがあり，我が国でも同様にしようという試みがある。そうした動きとともに，教員のメンタル面も変化し，より教員間で競争的な人間関係が作られると思われる。そうした状況でのメンタルケアが必要となる。

2）日本の教員の最近の労働時間は，他の国・地域と比べて，きわめて長く，最近教員が教育や子供と接する以外の仕事が増加している。

日本の教師が，非常に熱心に，多くの時間を使っているのは，疑いのない事実であろう。わが国は，多くの教員の努力で，国力が上がってきたのも事実であろうし，無私の姿勢で仕事に打ち込むのは美徳と言える。しかし，現在のメンタルヘルスの状況（多くの教員がメンタルヘルスの問題で苦しんでいる）は深刻である。教員で多く見られるうつ症状は，まず休息が必要とされるが，現在の学校では，休息は簡単に得られそうもない。

Karoshi（過労死）という表現が，海外から日本特有のこととして注目されるくらいである。諸外国では，教員としてのストレスがたまった時に，離職するのが当然であるかのようであるが（米国の教員の離職率は非常に高い），日本の場合は同じ職にとどまろうとするため，ストレスの源泉から離れることができないため，うつ症状を引き起こすこともあるのではないか。

教師の仕事である生徒指導・教育相談においても日本の教師は多くの時間を割いている。諸外国，例えば米国においては生徒指導・教育相談はスクールカウンセラー，ソーシャルワーカーなどがその多くを請け負い，特別支援も，専門の教育を受けた特別支援教師が担当する。さらに，学校では教員免許をもたない成人をアシスタントとして雇い，教員の補助としている。こうした教員を支える職業の存在が，まだ日本では充実していない。

また，教育と直接に関わらない業務が増えたり，勤務の評価活動にも時間を取られることもある。たとえばパソコン等の学校への導入は，教員にIT機器に向かわせる時間を大きく増加させ，教員同士や教員と子どもの向き合う時間を減少させ，教員のストレスの新しい一因となっているとも言われる。

3）国際的に見た教員のストレス

日本だけでなく，他の国でも教員は高いストレスにさらされているとの指摘があり，諸外国でも研究がみられる。英語の出版物では，英国，イスラエル，米国などのものがある。例えば，教員の燃え尽き症候群（バーンアウト）の存在は幅広く認められる。また，教員のストレス傾向との関連では，自尊心の傷つきやすさ（万能感の保持），教員の同僚性（collegiality）の重要性などを指摘した研究もある。

今後，海外（アジアも含めた）の実践者，研究者の情報をさらに得て，教員の給与，労働時間といった客観的な要因の他，教員のストレスの内容，ストレス対処法などについての研究を進めることが必要である。

引用文献

1）ベネッセ教育研究開発センター（2011）．ベネッセ第５回学習指導基本調査（小学校・中学校版）＜http://benesse.jp/berd/center/open/report/shidou_kihon5/sc_hon/＞（2011年９月03日）

2）文部科学省（2007）．初等中等教育分科会（第55回）・教育課程部会（第66回）合同会議　議事録　資料５-２　教職員をめぐる状況　＜http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/07102505.htm＞（2011年７月９日）

3）文部科学省（2011）．平成21年度　教育職員に係る懲戒処分等の状況について　表13　病気休職者数等の推移（平成12年度～平成21年度）＜http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1300256.htm＞（2011年８月６日）

4）Organisation for Economic Co-operation and Development（2010）.Education at a Glance 2010: OECD Indicators Indicator D3: How much are teachers paid?　＜http://www.oecd.org/document/52/0,3746,en_2649_39263238_45897844_1_1_1_1,00.html＞（2011年7月30日）

教員ストレスに影響する要因の検討

―― 学校教員の労働環境と意識 ――

Examination of Factors Influencing Teacher's Stress :

Teachers' Work Environment and Awareness

佐　野　秀　樹*・蒲　原　千　尋**

Hideki SANO and Chihiro KAMOHARA

教育心理分野

Abstract

This study examined some factors influencing teacher's stress. Salaries and working hours were considered as causes of the stress. The results showed that Japanese teachers have very long hours of work in comparison with teachers in other countries. Further, the teachers feel that the attraction of teaching is to help and influence youth to grow and mature; however, they feel they do not have enough time for children because of paper work and other administrative work.

Key words: teacher, stress, wage, working hours, international comparison

Department of Educational Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本論文では，最近増加する教員のメンタルヘルスの問題を取り上げ，その原因と考えられるもののいくつかを国際的な比較などを通して検討した。教員の年収，労働時間などの中で，日本の教員は欧米と比べ，労働時間が長いことがわかった。また，教員は子どもの成長に寄与することに仕事の魅力を感じているが，実際には文書作成などに追われていることがわかった。

キーワード: 教員，ストレス，給与，労働時間，国際比較

* Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）
** Kiyose-city Educational Counceling Center